

すり替わる記憶

札幌医科大学医師会

浦澤 正三

6～7年前より、94歳の長姉を中心に存命の同胞がカラオケ店に集まり、雑談したり食事をしたりするようになった。「三つ子の魂百まで」、それぞれの性格がいつまでも変わらないところが面白い。話の行き着くところはいつも幼時や若い頃のこと、あの頃近所に誰がいてどうしたこうした、あの時お前はこんなことを言った、などの他愛もない内容である。時に同胞間で記憶の内容が異なり自分の記憶違いだったと気付かされることもある。

3年程前、残された日誌とスライドやスナップ写真を基に書いた、初めての海外旅行（ソ連・北欧・英・仏・伊・希臘を廻る1ヵ月）の見聞を、母校の運動部の創部60周年記念誌に掲載してもらったが、続いて第2回目の旅行記（バンコック・ビエンチャン・クアラルンプール・シンガポールを廻る3週間の旅）について書き（未投稿）、数ヵ月前から再び思い立って3回目の旅（3ヵ月余のフィリピン滞在記）について書き始めている（札幌通信No.604、608、610号）。この一連の作業の中で、訪ねた場所とそこでの出来事（経験）について、執筆前の私の記憶と日誌やスライドの記録に食い違いのあることを発見し、大変ショックを受けた。

一つは、第1回目の海外旅行中でのことである。旅の25日目はローマに滞在しており、昼食抜きで午後1時過ぎ無人の古代ローマの遺跡、フォロ・ロマーノの石畳の道を凱旋門に向かい歩いていて、好奇心から制する者の居ないのを幸いに、突き当りの登坂可能な斜面を登ると、古代の建造物を壊したと思われる0.5～1メートルの大小の石がごろごろと横たわる広い空間に出た。しばらく行くと、「突然、この石の原は逆落し状の急坂となっていて、坂の落ち込んだ遥か下方の彼方に“揺り鉢状にくり貫いた斜面上に石段が同心円状に配列する闘技場風の遺跡”が望まれた。私は人目に触れない貴重な発見をしたと意気揚々と引き揚げた」。

上記のかぎ括弧の部分は私の記憶であるが、日誌にはこの‘大発見’の記録がなく、現場で撮った多くのスライドの中にもこの風景はなかった。結局、これは私の記憶違いということである。記憶違いと分ってよくよく考えてみると、石の原はいくら歩いても変わらぬ景色の連続に腹も減り諦めて引き返したのだった、との記憶が蘇ってくる。しかし、あの観光写真のように鮮明に脳裏に刻まれた“闘技場風の遺跡”の風景が何に由来したものか、未だに分

らないままである。

もう一つは、第1回目と第2回目の旅行中の出来事についての記憶のすり替わりだ。初回の旅の29日目、最終地ギリシャからの帰路のことである。アテネ国際空港の航空会社カウンターで荷物を預けた後、出国検疫の順番待ちの列にいと、「空港外から駆けつけ忙しげに辺りを見回しながら近づいて来た30代年頃の日本人男性に、何やら入ったB 5判大の茶封筒を手に渡された。『私は共同通信の記者ですが、この封筒には大至急東京支社に届けたい写真フィルムが入っています。すみませんが日本に着いたら何処でもかまいません、郵便ポストに投函して下さいませんか』。封筒には日本の切手が貼られ、速達の文字と先方の住所に加えて“rush!, rush!”（大至急）の文字が大書きされていた。互いに名刺を交換し、近隣の地で何か事件でもあったのだろうかなどと想像しながら、やや緊張しつつ引き受けた」。

上記の出来事（かぎ括弧部分）も日誌にはなく途方にくれたが、こちらはその後、2回目の東南アジア4ヵ国を旅行中のことと判明した。旅の11日目、ビエンチャンにあるワットタイ国際空港出発の際の日誌にこの記載があり、帰国後に届いた共同通信S氏からの礼状も挟まれていた。ホッとするとともに、自分の記憶の何とない加減なことかと呆れた。と同時に、残された記録のない過去の事実の記述には十分注意しなければ、と痛感させられた。

「人間の記憶とは何と当てにならないものなのだろう」と考えていた矢先、たまたま紙上書評欄で見た1冊が気になり買って読んでみた¹⁾。著者・ジュリア・ショウは、記憶の間違いが生ずる仕組みを研究するために人に偽の記憶を植えつける実験をしている研究者である。

本書には、自分の記憶に自信を持っている人間がいとも簡単に偽の記憶を作り出す実験結果が豊富に示されている。記憶は思い出すたびに強固でより正確な記憶を形成するように思えるが、そうではない。過去の記憶は検索され吟味されると、また一から作り直される（即ち‘上書き’される）のであり、この過程で生理的な歪み（他の記憶、見聞などの入れ替わり）が生ずるといっているのである。各種の事件関係者の過誤記憶に基づく証言がいかにも多くの冤罪事件を生んでいるか、の解説には全く背筋の凍る思いがした。

「記憶の上書き」については以前より他の脳科学の解説書で読んでいたが、人間のアイデンティティーが過去の記憶に基づいて形成される以上、アイデンティティー（個性）の一貫性と過誤記憶の問題はどう関連しているのか。一度よく考えてみる必要があると思っている。

参考資料 1)「脳はなぜ都合よく記憶するのか 記憶科学が教える脳と人間の不思議」、ジュリア・ショウ著、服部由美訳、講談社、2016年12月、第1刷発行。